

巻頭言

マヤの予言

会長 渡辺豊和

第三の太陽。四〇八一年間。この時代の人間は第二の時代を生き延びた男女の子孫である。彼らは果実を食べた。これは火によって破壊された。

第四の太陽。五〇二六年間。人間は血と火の雨のち飢え死にした。

これに続くのがBC三二一四年八月一三日の創造である。

マヤの予言が正しいのなら現在の五二二六年間も二〇一二年一月二二日には終末を迎えるからあと二年足らずの余命ということになる。この予言の結末は誰も予想できない。ただマヤは数と暦を重視した文明であったし天文学は驚くほど発達していた。

有名なテオティワカン紀元前

後に建設され六世紀末か七世紀はじめに正体不明の民によって破壊されるが、その直前の都市規模は二〇平方キロ、二〇〇〇以上の区画にわかれ、居住区に住む人々は一〇万人から二〇万人に達した。マヤはこのテオティワカンから強く影響を受け成立していった(マイケル・D・コウ 加藤泰建訳『古代マヤ文明』創元社)。テオティワカンの破壊は日本では聖徳太子の時代である。

マヤは三〇〇年頃から一一五六年か一一六八年に強大都市国家トウラが滅亡するまでである。マヤは中央メキシコに生じた文明であり、マヤ滅亡後メキシコは北部に文明の中心が移りアステカがマヤに代わるのである。アステカの首都チノテランは現在のメキシコシティ中心部にあった。

マヤの予言で終末の日、二〇一二年一月二二日は今や有名だが、この予言によると創造の日がBC

三二一四年八月一三日となっている。しかしマヤではそれ以前に四つの太陽時代があったとしている。

最初の太陽。四〇〇八年間。この時代の人々はトウモロコシを食べる巨人だった。太陽は水によって破壊された。洪水によって滅んだ

というわけだ。それで人間は魚になった。一对の男女だけが難をのがれ水のそばの高い木にかくまわれた。彼らの子孫は地上にふえ自らの国々の神となった。

第二の太陽。四〇一〇年間。太陽は風の神によって破壊され、人間は猿に変身し木々にしがみついたり生き延びた。岩の上に立っていた一組の男女だけがこの破壊から救われた。この時代は黄金時代と呼ばれ、風の神に統治された。

マヤの予言が注目すべきなのはマヤ文明の特徴、数と暦の精緻な関係が天文学的周期を正確に写しとっているからだ。金星の公転周期を把握していたのは有名だが、それだけではない、水星、火星、木星、土星に至るまでその公転周期を知っていた。日食月食の周期を知っていたのは勿論のことである。ヨーロッパなら中世の暗黒期の真っ只中にマヤでは極めて高度な天文学が確立されていた。

モーリス・コットレル他 田中真知訳『マヤの予言』（凱風社）によつてこの予言がどんな天文的メカニズムと結びついているのかのぞいてみる。

マヤでは二〇進法が取られているが一年は二六〇日である。

二〇キン||一ウイナル(二〇日||

一ヶ月)

一八ウイナル||一トウン(一八×二〇||三六〇日)

二〇トウン||一カトウン(三六〇

×二〇||七二〇日)

二〇カトウン||一パクトウン(七

二〇〇×二〇||一四万四〇〇〇

日)

二六〇日、一年と一八ヶ月三六〇

に悪い日、五日を加えて三六五日

を一年とする二通りの一年があつ

た。三六五日に四分の一を加え

る計算はなく閏年がなかったため

一年は実際とはずれていった。た

だ金星周期と重ねることですのず

れを調整していた。

マヤで一三六万六五六〇日が極

めて重要な「超数」なことはわか

っているが、その意味を追求した

のが『マヤの予言』なのである。

この一三六万六五六〇は次のよう

にあらわせる。

二六〇日の五二五六倍

三六五日の三七四四倍

五八四日(金星の平均周期)の二

三四〇倍

七八〇日(火星の平均周期)の一

七五二倍

一万八九八〇日(アステカ世紀)

の七二倍

『マヤの予言』の著者コットレルは一三六万六〇四〇日を太陽黒点周期から割りだしたが、一三六万六五六〇日はこれに二六〇日の二倍、五二〇日を加えた日数なのである。

コットレルは自分が割りだした太陽黒点周期の超数に二六〇日の二倍を加えたのがマヤ暦の超数となれば何故三六五日以外にもう一つ二六〇日が使われていたのか、その真相を見極めることができると考えた。というのも「四つの太

陽」時代区分は太陽黒点周期と関わっているのではないかと見当がつけられたからだ。一三六万六五六〇日は一年三六五・二五日(グレゴリー暦)では三七四一年強だが、これより一年少ない三七四〇年は太陽黒点長期周期一八七二年〇周期分だ。

黒点出現と消失はおよそ一年周期であるが、一八四三年R・ウォルフによつて確かめられている。コットレルは黒点活動を研究検討した結果、次のようなことがわかったという。

(a) 八七・四五四五日(一ビット)。太陽に二つの磁場のお互いの関係がはじめにもどるためにかかる期間

(b) 八ビット||六九九・六四日(小周期)

(c) 四八ビット||一一・四九二

九年

(d)七八一ビットⅡ一八七年(一黒点周期)

(e)九七×一八七年Ⅱ一万八一三九年(歪曲中性層の一周期)

(c)の一・四九年はR・ウオルフによる通説一・一年の精密解だ。

(d)の一八七年の二〇倍がコットレルの割りだした一三六万六〇四〇日なのだ。

それと注目すべきは(e)歪曲中性層の一周期一万八一三九年だ。二〇一二年一月二二日の終末から第二太陽誕生までさかのぼると五二二六五〇二六四〇八一+四〇一〇Ⅱ一万八二四三年だ。これは一〇四年多いだけではないか。最初の太陽時代はまったくの未開時代であり、人類は文明を展開していないから太陽の恩恵が文明に

何の影響も与えていないので除外している。

太陽の赤道の周りには二つの磁極が正確に均衡を保つ領域がある。そこでは北極と南極のどちらも優勢になることがない。この領域は二つの磁界が宇宙に広がっていく間にできた薄い中性の層、もしくはは面界なのである。太陽の磁界には複雑な性質があつて、この層は平坦ではなくねじれている。中性層は一八七年(黒点周期)ごとに一周期ごとにずれていく。これがもとの位置にもどるには黒点周期一八七年で一回が三度、同じく二〇回が二度、合わせて九七回まわらなければならない。九七×一八七年Ⅱ一万八一三九年かかる。

コットレルはマヤでは太陽黒点周期の詳細を知っていて超長期の文明史を展開していたと確信して

いるが、実はコットレルの黒点周期説は専門の学会から認められていないと共著者エイドリアン・ギルバートが書いている。

『マヤの予言』が重要なのはピラミッド、神殿などマヤの建築配置が「イワクラ」から発展した気配が濃厚だからだ。

「イワクラ」の巨石配置が天の川、星座、北斗七星などを写しとっているものが多い。これが建築まで発展していったら、建築配置が天球の写しである可能性が極めて高いのは当然のことになる。それだけではない。マヤの一つ一つの建築自体も天球の写しであるかもしれないのだ。

了